

彌兵衛と云ふ。利常卿の命に依て、寛永年中上京し、明の沈惟敬來朝せし頃、大坂藥種屋定齋へ相傳せし藥飴の方十一品、京都中嶋淨雲傳授し居たるを相傳し來り、若松村に於て大明飴・延壽飴等を製し差上げたり。是より世人若松飴と稱し、其名高く、當國の名産とす。彌兵衛の甥善兵衛、藥飴の製法を傳受す。善兵衛の子傳右衛門、元禄元年に若松村より金澤へ出で、卯辰八幡町に居住し、藥飴を賣弘め、城内二丸廣式向の御用飴を製造す。故に世人御用飴屋と呼べり。同十二年正月より、每春嘉例として寶船の畫を二丸廣式向へ献納す。元文三年に觀音町へ居宅を移し、是より世々爰に居住せり。利常卿判書の寫。

七月六日

利常判

勇甫へ

火箸二對

若松村 彌兵衛

右舉之候條、心得可申聞者也。

六月

利常判

今枝與右衛門殿

内藤清兵衛殿

按ずるに、元禄四年二月加州産物取調書に、加賀郡若松村冬より春まで飴を製す。則若松飴と稱す。とありて、元禄元年に飴屋傳右衛門金澤へ出でたる後も、尙其の庶家若松村に居残り、若松飴とて飴を製造せしにや。金澤家柄町人金屋彦四郎より利常卿へ献上目録に、若松あめ一箱飛脚を以て上之。と載せたり。三州名物往來と云ふものにも、若松飴を記載し、従前は加賀名産となしたりといへり。或は云ふ。むかしは食品も今と違ひ質素にて、石川郡野々市煎餅・河北郡若松飴とて、兩品共に名物となして、藩侯までも召上られしかど、後追々華美に移り、野々市せんべい・若松あめなど、賞瓶するものもなく遂に絶えて、今は兩品とも其の名さへ知るものなしといへり。按ずるに、飴は新撰字鏡の食部に、嫩蘇早反、上、阿女。とあり。和訓栞に、飴錫をあめといふは甘き義なり。錫はしるあめなり。江戸にて水あめといふ。八斛麥あり、錫に作るによろし。飴をねぶらすといふ俗語は、後漢書に含饴弄兒孫と見え、大學衍義に、啗以甘言而陰陷之といへる意なりといへり。あめ賣

の笛を吹く事は、古く西土より傳はれり。詩箋に、簫編小竹管如今賣鶴者所吹也と見たり。されば三官飴も、西土の商人三官に據れり。菊川飴もまた同じとあり。是等の事も若松飴の参考とすべし。

○暮柳舎希因傳

坂井一調が根無草に云ふ。暮柳舎希因先生は金澤觀音町に住居し、俗名を綿屋彦右衛門と稱し、家業酒造にて錢商賣せられし也。本姓は小寺氏なり。そのかみ伊勢の麥林子・加陽の希因師は、普く天下に鳴る程の俳人とも申し侍らん。見龍子は學才ありて風雅に鳴るといへども、みづから鳴るといふべし。西に遊ぶ時は西花坊と呼ぶべし、東に遊ぶ時は東花坊と知るべしなど高言あり。是みづから鳴るの徒なり。麥林子・希因子は俳諧の夫子とかせん。麥林子は伊勢の神職中川氏にして、田畑多く持て福有也。さればこそ發句のさま風雅のみ多し。希因子は家業を守り、閑暇に風流に遊べり。商家の習ひ酒狂人、或は錢商賣をもせられし故に、店先に於て盜賊などに逢ひ、公邊へ訴出づる事しげし。一とせ往く年の暮に、度々の訴訟に町會所へ出でられた

り。人々度々の訴訟いかゞといふ。無是非仕合に候也。是も商家の煩ひにこそと希因答へけるとぞ。又或夜雪の降りける頃、連中へ行き、希因戻るとて、亭主は戻る事なし、今夜の樂みは増りなんとぞ。風雅の心中より出づる言葉にして、宗匠の氣質溫和の人物、行狀また無類の徳質なりといへり。右等の傳説にて、其爲人を知るべし。さて希因は趙翠臺北枝の門人にて、寶暦元年に歿せり。此子後川も俳名高く、父が家風をうけ繼ぎたり。暮柳舎發句集二卷は、則希因の句集にて、卷首に暮柳舎希因著男後川撰。とあり。また後川が著せる言葉の露の序に云ふ。星移り物換りて、亡父暮柳舎希因去命して三十歳餘り三とせの秋を経たりき。今宵は文月十日の空、雨雲の處まだらに月ほの闇き中に、そが慕の文字消えて良。さし覗くばかりにあれば、再び手向の墨を續がんとなり云々。日毎に松根の塵を拾ひて、長く蕉家の道を清めぬる事、偏に風子の音信をまつのみ。頃は天明三卯年、加賀國金府の隠士小寺後川記す。とあり。金澤蕉門家譜を見るに、希因號百鶴園、後暮柳舎。とありて、南無庵關更等皆希因の流にて、金澤俳人の鼻祖といふ